



2010年3月18日
号外 No. 328
(第1・第3金曜日発行)
民主党プレス民主編集部
〒100-0014
東京都千代田区永田町1-11-1
電話03-3595-9988(代表)
press@dpj.or.jp
http://www.dpj.or.jp



学生編集

特別号

私、長島昭久、
学生のインタビュー
に答えました。



(2010/03/06 インタビュー時に撮影)

「はじめに」

私たち長島昭久事務所のインターン生は

「政治の現場を知りたい」「安全保障について学びたい」

という志をもって、地元立川の事務所を中心に活動しています。

そんな私たちのために、代議士がインタビューに応じて頂きました。

テレビや新聞の報道からはわからない生の声を聞くために、

私たちが抱いている素直な疑問をぶつけてみました。

代議士の政治家としての理念、若者に対する熱いメッセージを

皆様にお届けします！



皆さまからの一言が、 政治を変える長島代議士のエネルギーになります！

私たちは、インターンでの経験やインタビューから得られたものを、多くの方々と共有することを目標としています。長島代議士のインタビュー回答に対するご意見・ご質問や、この記事に対するご感想を tokyo21@nagashima21.net までお寄せください。皆さまからお寄せいただいたご意見は、私たちが責任もって代議士にお伝えいたします。



長島フォーラム 21: <http://www.nagashima21.net/> 長島昭久 WeBLOG『翔ぶが如く』: <http://blog.goo.ne.jp/nagashima21/>

インタビュー

一、若者と政治について

Q. 若者の政治に対するイメージがよくないこと、また、若者が政治に興味関心を持っていない現在の状況を、どのようにお考えでしょうか？

A. 残念なことだね。僕が学生時代に感じていたイメージと変わらない。学生時代に、ロッキード事件等があつて、その間に政治改革を行ったにもかかわらず、未だにこういうことがあるのは、本当に恥ずかしいことです。また、マスコミの影響が非常に大きいとも思います。マスコミは、国民の厳しい視線を反映しているのだから、甘んじて受け入れるしかない。ただ、多感な若い人達には、まさに辟易するような状況だと思います。こういう状況を正さなければならぬ。

また、アンケート結果(※インタビューに先立ち、若者の政治に対する意識を調査するアンケート調査を実施)の中に「そもそも政治家に期待することが他人任せだ。有権者の一人ひとりが政治に責任をもつて、社会を作り、変えるという意識こそ重要だ」という意見があつて、おもしろいと思いました。政治家の責任を放棄や回避するつもりはまったくないが、若い人にはこれぐらいの気概を持って欲しいです。政治は社会を映し出す鏡なのだから、頑張つて日本を良くしたいと思つている人が多くなればなるほど、良い政治になり、良い政治家が出てくるだろうと思います。そこで、これからの社会に出て行く皆さんにはそういう気概を持つてもらいたいと思います。

Q. 若者達の中では「政治家を身近な存在として感じない」「政治家になる人の気持ち理解できない」という想いがあると思います。そこで、若者達のその想いを少しでも解消し、政治家を身近に感じて貰うために、代議士が政治の道を志した理由をお尋ねします。

A. 七〇年代に、ソ連がアフガンに侵攻した事件や第二次石油危機がおこり、世界が動揺し、日本経済も打撃を受けました。しかしその様な世界情勢の中で、日本の政治は相変わらず、内向きの争いをやっています。このギャップに驚きました。日本の政治はなぜこんなことをしているのか。その疑問から、国際社会で通用するような政治家になりたいと思いました。そして、大学の法学部に進んで、憲法の九条を中心に国際関係・安全保障を勉強しました。

大学院で博士課程に進んだころ、八九年に、親しかった石原伸晃氏が日本テレビの記者を辞めて、選挙の準備をすると言いました。彼は父の慎太郎氏とは違う選挙区で出ると言い、それに好感を持ち、応援することにしました。その選挙で勝ったあと、誘われて秘書になりました。それが政界に触れる最初のきっかけでした。



二、留学生・教育・労働について

Q. グローバルな留学生争奪戦、そして福田内閣の「留学生三十万人計画」について代議士のご意見を伺いたいと思います。

A. 日本の政策にとつて、日本人が頑張ることは第一義だと思います。しかし、外国からやる気のある優秀な学生を招き、刺激的な競争環境を国内で作出し、お互い刺激し合いながら、切磋琢磨し、相互に能力向上を図っていくということは日本人の学生を鍛えるという観点からいってもプラス。それに、留学生がさまざまな知見を日本の学生と共有することは、日本にとつても、ある種知的な財産の蓄積になつていく。留学生が自国に戻つても、彼らにかけた奨学金などのお金は決して無駄ではない。日本に対するプラスのイメージを持つて帰ることができれば、その国と日本との間の将来的な友好関係に大きく寄与すると思います。

留学生に対する日本社会の対応も、考えていく必要がある。私が学生の時に、アメリカに留学した人はアメリカを大好きになつて帰るが、日本で留学した人たちはほとんどが日本を嫌いになつて帰つてくる、と聞きました。なぜかという、学位を取るのが非常に難しいのと、日本の社会が少し閉鎖的だから。『逝きし世の面影』(渡辺京二)に書いてあるように、元々幕末明治に日本に来た外国人の日本に対する評価は、素晴らしかった。僕は毎年留学生でインターンをしたという方がいれば、なるべく受け入れていきたい。そういうことを積み重ねてい

て、日本のイメージができていくのだと思います。

Q. 現在、民主党で議論されている「子ども手当法案」の目的および期待される効果について、代議士のお考えをお聞かせください。

A. やる気がある人の芽が摘まれてしまう、経済的理由、社会のサポートの不足、制度の矛盾によって、子どもを産みたくても産めない、産むと損をする。こういう社会のままでもいいのか。この状態が、人口工学上、少子化を促進するという社会全体のデメリットもさることながら、そういう人生観・家庭観で幸せなのか。子どもを産み育てることの喜び、人類に与えられた素晴らしさに、社会の歪みがブレーキをかけてしまうというおそれ、そこが「子ども手当」の原点です。だからあとは方法論であって、小児科や学童保育など、社会全体で子どもの面倒を見ていくような「子育てインフラ」を充実させることにより、産みたくても産めないという制約要因に政策的に答えていこうというのが、民主党の政策です。

Q. 代議士ご自身もお二人の娘さんのお父様として、子どもの教育や生活環境を改善するためには何が必要だとお考えでしょうか？

A. 勉強への意欲や将来への希望は、おそらく家での会話、親の姿勢にかなり影響されると思う。そういう意味では、家庭での子どもとのコミュニケーションというのはものすごく重要だと思います。私個人的には、短くても濃い時間を持つことが求められていると思う。それも、アメリカに行つて僕は家庭観

が随分変わりましたね。アメリカでは、子どもを両親で育てている。そういう環境を父親がどれだけ提供できるかというのも、子育て政策だと思います。

Q. 今国会で派遣労働者法が改正される見通しですが、代議士ご自身は派遣業の規制に関してどのようなお考えなのでしょうか？

A. 派遣は確かに不安定な雇用だと思います。しかし一方で、派遣という働き方を自ら選んでいる人もいるということも事実です。企業の弾力的な人事採用のためにも、新規採用の維持のためにも、派遣のような緩衝材は必要だと思います。

また、今はパートや派遣として頑張っている人を、正社員として雇用していく仕組みや企業のモラルを促進していくことが、実は重要だと考えています。

経済全体の強さ、持続的な発展ということを考えれば、この派遣という業態は規制の対象にする必要があるのか、と私は疑問を持っています。

三、安全保障問題について

Q. 代議士が政治家を志した当時と現在においては日本の安全保障はどのように変化したとお考えでしょうか。

A. 一般論では、『新たな脅威』と呼ばれているテロリズムや、いまや『自然災害』も世界的な脅威であります。それからミサイル、核兵器の技術のような

ものが世界に拡散しています。その結果、今やテロはバーチャルではなくどこにでも起こる可能性があります。つまりは、今までのように目に見えている力、ソ連がどこに攻めてくるのかとか、そういったことに警戒感を集中させておけば済む時代ではなく、ありとあらゆる空間を超え時間を超えて脅威は一瞬にしてやってくるという安全保障環境なので、非常に複雑になっていくという安全環境なので、非常に攻めてきたらどうするかという時代から、常に日本の周囲にそれはもう宇宙から空から、海底から、それからサイバーペースに至るまで、常に目を光らせていないと、なかなか国民生活の安全というものを守れなくなってきた。三〇年前と比べたら、いまは独自の情報収集能力を見つけないといけない、このような時代になったと思います。



Q. 普天間基地移設問題において本来議論すべき視点について、ご説明をお願いします。

A. 普天間基地は市街地の中心にあり、周辺住民は騒音や事故の危険にさらされている。この状況を何とかしようというのが、普天間基地移設問題の原点です。なぜ沖縄に基地が必要なのか、なぜアメリカは海兵隊なんていう部隊を日本に置かなければならないのか。本来はそういう議論を政府でして、マスメディアを通して国民もある程度共有しなければならぬ。また、今年が安保改定五〇周年。日米間で安保条約を深化させていく節目の年です。日米の問題どうなるんだろうと、不安にかられている一方で、関心を持っています。関心を持っている時に正しい議論を国民の前ですというのが責任だと思います。もう一点、今回の基地問題の一番の力加は何かというところ、沖縄の皆さんには引き続き負担をお願いせざるを得ないと思っています。しかし、沖縄の皆さんが、この状態がいつまで続くんだ、沖縄には基地以外の経済の仕組みはないのか、と思っ

Q. 自衛隊がソマリアにて国際貢献をすることで日本国民のメリットについて、お聞かせください。

A. ソマリア沖アデン湾というところで、海賊がこの三、四年急増した。ソマリアという国が崩壊したことが原因で、生活できなくなった漁師たちが、外

国船舶を捕まえて人質に取り、身代金でビジネスをやろうとしている。日本を含め、世界中の船舶が被害を受けた。そこで、各国は海軍を派遣して警備に当たらせているわけです。我が国も海上自衛隊の船を出して、民間の船舶を護衛しようということになりました。日本だけが法律上、日本の船舶は守るけど、「あなたの船舶、積み荷は日本関係ではないので、助けられない」と。こういう行動は、国際社会では非常に利己的な行動ですから、われわれも気分が悪いですよ。また、海賊の脅威というのは、日本だけに及ぶのではない、国際的な脅威だからね。税金がかかっても、ガソリン代ぐらいいですから。自衛隊は、軍用機を使って情報を各国に提供したりして、かなり重層的な貢献ができていますので、日本の国際貢献の非常に大きな成果として、みなさんもサポートしていただければありがたいと思います。



私たちインターン生は全員が現役の大学生で、政治に対して距離感を持っているような普通の大学生です。おそらくこの記事を読んで下さっている方々の多くと同じように私たちも当初は長島昭久という政治家についてほとんど知りませんでした。その私たちが二ヶ月のインターンシップを通じて、長島昭久がどのような政治家であり人物なのか、わずかながら知ることができました。インターンが始まった当初のことでした。代議士とお食事する機会があり、代議士は娘が本を読むようになるにはどうしたら良いかや、youtube でお笑いを見ているというお話を伺い、政治家の堅いイメージとは違う印象を受けました。代議士にお会いする度に感じるのは、本当に政治家なの？と思う程にクリンで、また芯を強く持つていらっしゃるということです。日々の報道から、多くの人が政治家への不信感を抱いていることと思います。しかし、代議士と接していると政治への安心感を覚えます。支援者の方々ははじめとする国民の声に、耳を傾けて下さっていることがわかるからです。実際に、現在代議士は普天間基地問題などでお忙しいにも関わらず、私たちのインタビューにに応じて下さいました。この企画の意図としては、私たちの疑問に対する代議士のお考えを伺うことはもちろんですが、その回答を記事にすることによって、同世代の方々に長島昭久がどのような政治家・人物であるか知って欲しいという思いがありました。この記事を手にした方々の生活の基盤である、立川・日野・昭島の代表がどのような人物なのか、この記事を通じて少しでも知って頂けたら幸いです。

長島事務所 二〇一〇年度春季インターン生一同